

予習ビデオの工夫、高度授業TAの導入、 Course N@viを使ったピアレビュー。 効果を上げた3つの取り組みとは

担当する一部の科目で、予習ビデオによる「反転授業」を導入している大鹿智基教授。「管理会計論」では、ビデオを多くの学生に見てもらうために「視聴をすることでのインセンティブ」を設けたという。また、2018年度は高度授業TAによる新たな工夫が授業にプラスされ、さらに教職協働研修からは「Course N@viを利用したピアレビュー」というアイデアも生まれた。これら3つの取り組みの詳細と背景、教育的な効果について話を聞いた。



大鹿 智基
商学大学院 教授



上田巧 (高度授業TA)
教職協働研修チーム:
伊坂友宏 (校友課)
中西あい (経営管理研究科)
濱田大輔 (国際部国際課)
森本 涼 (キャンパス企画部企画・建設課)



予習ビデオを見ていれば答えられる テストの実施で「視聴率」がアップ

今回は、大鹿教授のほか、通常のTA (ティーチング・アシスタント) 以上に授業にコミットした役割が求められる高度授業TAの上田巧さん、そして、早稲田大学職員による教職協働研修で授業に関わった伊坂友宏さん、中西あいさん、濱田大輔さん、森本涼さんに話を聞いた。

大鹿教授は、以前担当していた「原価計算論」で10分程度の予習ビデオを作成し、学生たちがそれを視聴して授業に臨むという「反転授業」を実施。「ビデオの視聴回数が多い学生ほど成績がよい」というデータが得られるなど大きな成果を上げていた。そこで、「管理会計論」でも同様の取り組みを行うことにしたという。

『「管理会計論」は、経営者の立場から、会計情報の数字を使った意思決定と業績評価の考え方を学ぶ科目です。重要なのは、どのように意思決定や業績評価をするかという部分ですが、根拠となる数値を導出するための計算技術習得も必要です。ただ、授業中は計算よりも意思決定や業績評価をどう考えるべきなのかという思考の練習のほうに時間を割きたい。計算については予習ビデオである程度学んできてもらえると、授業ではディスカッションなどに時間を取ることができます」。

予習ビデオの長さは、これまで同様10分程度を目安とした。その理由は、長すぎると学生になかなか見えてもらえないためだ。また、ビデオに内容を盛り込み過ぎると、授業で話すこととダブってしまうという。さらに、長いビデオを作成するのは教員にとっても負担が大きい。「10分程度なら、休み時間や通学途中の電車の中で気軽に見られる長さで、ちょうどいいと考えています」。

ただ、これまでの経験から回を追うごとに視聴する学生が減ってしまうという問題もあった。「最近では、スマートフォンが一般的になってきて、視聴環境のハードルはかなり下がっています。せっかくいい内容のビデオを作って、成績向上にも役立つとわかっているのに見てもらえないのは残念です。そこで、『視聴率』アップのために、今回はビデオを見たことが確認できる仕組みを取り入れました」。

具体的には、ビデオの最後に「あなたならこういうときにどんな意思決定をしますか?」といった質問を投げかけて、それを授業でのディスカッションのテーマとした。併せて、予習ビデオの内容を問う「確認テスト」も実施。予習ビデオは全部で12回分で、そのうちの7回ほどで確認テストを行い、1回分で2点満点とした。毎回満点なら、14点分として成績に反映される。

「テストと言っても、ビデオを見てさえいれば必ず答えられる問題で、かつノートも持ち込み可です。テストの結果を見る限りでは、ビデオを視聴し続けている学生は増えていると考えています」。

教員の講義中に、高度授業TAが解答を確認。 「よい意見」を抽出して教員につなぐ

確認テストのうちディスカッションのテーマとなる質問の答えは、「学生によって意見や判断が異なるので正解は特にありません。似たような回答が多いですが、中には非常にいい回答もあります」。

ディスカッションに入る前には、大鹿教授が講義を行い、その間に高度授業TAである上田さんが全員分の解答をチェックする。ここに、今回紹介する2つめの取り組みがある。厳密には、ITツールを使った工夫ではないが、オンデマンドの予習ビデオに関わる取り組みということで取り上げる。

上田さんは、大鹿教授が講義をしている10~15分の間に、集められた用紙に書かれたディスカッションのテーマに対する個々の意見にすべて目を通す。そして、「ここまでは考えてほしい一般的な解答」には実線を、「特徴的な解答」であれば波線を付けるという作業を行っている。「大鹿先生からは、当初そうした指示があったわけではありません。ただ、高度授業TAとして何かしらできないかと思い、内容によって線を引くことを考えつきました」と、上田さんはこの取り組みを始めたいきさつを振り返る。

今年度から「高度授業TA」の制度が始まることを知り、公認会計士の資格を持ち、管理会計についても深く理解をしている上田さんを高度授業TAに採用した大鹿教授だが、当初考えていたのは予習ビデオのコンテンツの相談、試験問題の作成・採点など

だった。上田さんの工夫は、初回の確認テスト後に上田さんから解答用紙を渡されて初めて気づいたようだ。

「テーマを提示する際には、当然こちらでもいくつかの解答を想定しています。ただ、学生は人数が多く、また知識がない分、意外な答えを出してくることもあります。よい内容はもちろん、新しい考え方を紹介することは、他の学生の気づきにもなるので、これはいい方法だと思いました」。

見るべき解答を上田さんが事前にピックアップしているため、解答の紹介をスムーズに行えることもメリットだ。「それからは、改めてお願いしてこの取り組みを毎回続けています」。

「Course N@viでピアレビューができる!」 教職協働研修から生まれたアイデアとは

3つめの取り組みは、早稲田大学に入って比較的年次の浅い職員を対象にした「教職協働研修」から生まれた「Course N@viを使ったピアレビュー」のアイデアだ。ピアレビュー (相互評価) とは、論文やレポートをお互いに読み合って評価することを指す。

「お互いにレポートを読み合っ、つけられたコメントを読むことで得られるものは多いのですが、人数が多くなかなか難しいという問題がありました。しかし今回は、教職協働研修の中からいい方法が提案されました」と大鹿教授。

職員の中西さんが代表して説明する。「ピアレビューでは、教員が「AさんがBさんのレポートを、BさんはCさんのレポートを読んでください……」のようにアサインするのが一般的ですが、人数が多くなるほど「誰が誰のレポートを読む」と指定するのが大変です。そこで、Course N@viで提出されたレポートのソート順を利用することで、先生が関わらなくても学生が誰のレポートをレビューするべきかがわかるという仕組みを考えました」。

レポートの並べ替えは、学籍番号順、提出日時順などいくつかできるが、今回はデフォルトの順番を採用。学生は、自分の学籍番号の後に付いているチェックディジットの数字を見て、それが8であれば、8番目、18番目、28番目のレポートを読んでレビューをしていく。「これなら、こちらは最初の指示を与えるだけでよい

ので、手間はほとんどかかりません。また、レビューはレポートのコメント欄に書き込むので、自分のレポートにどんなレビューが書き込まれているか、すぐに確認できます」。

大鹿教授も、別の授業で実施したプレゼンテーションの相互評価と比べて、格段に手間がかからないと話す。「たとえば4人がプレゼンをする場合、それぞれの学生が1枚の紙に4名分の評価を書き、それをこちらで4つに切って発表者の学生に渡していました。これだと1時間半はかかりますが、今回の方法では最初の指示と、レビューに対する採点くらいしか手間はかかっていません」。

Course N@viを使ったレポートのピアレビューは、今回が初の試みだったが、レビューの質の向上とモチベーションアップのために、よいレビューをした5名を選んで授業中に表彰したという。

今後の課題としては、レビューの書き方や選定の理由などを事前に提示していくことを挙げる。また、学生によってレビュー数に多少偏りがあったため、どのソート順を使用するかなど、ルールの説明についてももう少し検討していくという。

中西さんたちは、今回の取り組みを何らかの方法で学内に発信していけたらと考えている。「Course N@viにピアレビューという機能はありませんが、レポート機能とコメント欄を活用すればピアレビューは可能になる。こういう方法がありますよ、ということを広く伝えていくことには意味があると思います」(大鹿教授)。